

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.1 January 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



1

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
お墓地に続く道  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」  
(15)  
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相④  
／加藤 匡人 ..... 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (23)  
戦後の台湾社会の変化と伝道庁復興  
／山西 弘朗 ..... 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (38)  
21世紀のライシテと天理教のフランス布教⑧  
／藤原 理人 ..... 4
- ・ イスラームから見た世界 (32)  
世界神学とは②——つしか知らない者は、一つも知らない——  
／澤井 真 ..... 5
- ・ 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (新連載)  
はじめに  
／山本 和行 ..... 6
- ・ 2024年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (10)  
第4講：36「定めた心」  
／八木 三郎 ..... 7
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 8  
第372回研究報告会 (11月7日) / 2024年度宗教研究会兼伝道研究会を開催 (11月8日) / 連載執筆のねらいと執筆者紹介 / 2024年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### お墓地に続く道

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

私が天理小学校の2、3年生の頃、昭和40年代のことだが、月次祭の度ごとにお墓(天理教豊田山墓地)に向かう道の両脇には沢山の屋台が並んでいた。大祭の時などは、西境内の辺りから北大路の交差点を越え、豊田山に続く道を当時の養徳院の前を過ぎる辺りまでびっしりと軒を並べていたと思う。祭典日の数日前から店が並びだし、祭典日の翌日もまだぼつりぼつりと店が残っていたような気がする。幼い頃のことなので、記憶のねつ造という可能性もあるが、そのように記憶している。小学校の下校時は、現在の西境内地の駐輪場横の道を通り、2名の傷痍軍人を脇目にL字に折れる道を左に曲がり、その先を右に折れてお墓地に続く家路を歩いた。

乾物屋、お茶屋、反物屋、瀬戸物屋、金物屋、履き物屋などがあつたと思う。子供の目を引く食べ物では、回転焼き、天津甘栗、綿菓子、リンゴ飴の店があつたが、たこ焼きや焼きそばを売っている店の記憶はない。お面、スーパーボール、巻き取り笛など、種々の玩具を売る店もあつた。ただ、おもちゃの場合、その年に流行した一点物を売る店があり、アメリカンクラッカー、スピログラフ定規などのおもちゃはその場で実演販売していて、ランドセルを背負ったまましげしげとそれを眺めていた。私が欲しかったのは、ゴム動力で羽根がパタパタと動いて飛ぶ黄緑色の鳥のおもちゃである。子供の目にも華奢な造りの玩具だったので、どうせこれはすぐに壊れると言ひ聞かせ物欲を抑えていた記憶がある。日用品の一点物の実演販売では、包丁研ぎ器や針糸通し器があつたが、これもまた子供の目にもちゃちな作りのものだった。

お墓地への参拝者でござつた返す道を彼らの間を縫い、色々な店を見ながら下校したのだが、なかでも私の興味を引いたのは古い本の類いを話術で売る商売人だ。お墓地へ続く道、川をまたぐ交差路の右手(東側)の電柱の前

に三脚を立て、絵の描かれた白布を垂らして滔々と話をし、最後に本を売るのである。私の記憶のなかでは、柳の下の幽霊、背を向けて去って行く人たちに追いつがる男性、墓石などのおどろおどろしい絵があつたように思う。細身の中年男性の「妊婦が墓参りをして墓石に水をかけますと、よからぬ事が起こるのでございますう〜」という口上に何か恐ろしいことが起こるのだと震え上がり、家に帰って母親に尋ねた記憶がある。母の説明を聞き終えると、ランドセルを置いて再び出陣。彼の話が2巡目に入っても聞き続け、最後には「小僧、あっちに行け」と追ひ払われた。

先日、その話を母にすると、大声で喋る「大口お婆さん」と呼ばれる女性の古い本売りがいたという。辻立ちしていた場所は、私の記憶と異なり、養徳院の角の交差点とのこと。彼女についての記憶は私には全くないが、私の知る男性商売人の先輩だったのかもしれない。いずれにせよ、とにかく祭典終了後のお墓地への参拝者の数は多かつたのである。人々の間を縫って下校したというのは記憶のねつ造ではない。教祖80年祭から90年祭に向かう教勢のあつた時期だったので、帰参者が多かつたということもあるが、祭典終了後、お墓地参りをするのが彼らのルーティンだったのであろう。あれだけ多くの人全てがお墓地にお墓を持っていたとは思えない。彼らがお参りするのには教祖の墓地であつたはずだ。

その頃のお墓地へ続く道の混み具合を考えると、当時の帰参者のマインドマップの中では参り所として教祖の墓地が占める割合はかなり大きかつたのではないか。もちろん、現在でも祭典終了後にお墓地を参拝する人はいるが、帰参者全体のなかで占める割合は当時と比べれば少ないだろう。そして、彼らの多くは、豊田山舎や自分の家のお墓に参るのが主たる目的ではなからうか。現在、教祖の墓地参りをするためだけに豊田山への道を登っていく人はどれくらいいるのだろうかと思う。

## ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相④

## 天理日仏文化協会設立の動き

1969年に天理教海外布教伝道部パリ出張所の建物が購入されたと前回述べたが(2024年11月号)、その翌年の7月22日に神実様が鎮められ、天理教のヨーロッパ最初の本部拠点が開設された。初代所長には西村勝嘉が就任し、いよいよ活動を開始することとなる(天理教ヨーロッパ出張所 1992:13)。

しかし、出張所の建物の規模や立地などの制約もあり、活動は出張所ではなくパリ市内で行うことになる。この時点では具体的な活動内容は決まっておらず、候補に挙がっていたのは保育所、お茶やお花の教室、そして日本語教室であった。その中で、保育所については保育士を雇わないといけない上に子供の人命に関わるという点、またお茶やお花は趣味や習い事で終わってしまうため長続きしないという点も踏まえ、最終的には、日本語学校を始めという方針が1970年9月に決まる(鎌田 2013; 鎌田親彦とのインタビュー、2014年11月11日)。

ここで少し遠回りになるが、日本語学校が選ばれた経緯を少し詳細に述べておきたい。なぜなら、鎌田自身が強調しているように、そこに中山正善2代真柱がヨーロッパで築いた人脈が大きく関わっているからである(以下は、別に注記のない限り、鎌田[2013]及び上述のインタビューを基に記述)。

それは具体的には、2代真柱が当時外務省に勤めていた鈴木敦也との間に築いた関係である。2024年7月号でも紹介したように、2代真柱は1960年にヨーロッパを巡教しているが、その途次でギリシャを訪問した際に、現地の日本大使館で副領事官を務めていた鈴木に案内を受けている(中山 1960:105-116)。その後、鈴木は1961年に旧ベルギー領コンゴであったコンゴ共和国レオポルドヴィル(現在のコンゴ民主共和国キンシャサ市)の日本大使館に赴任し、そこでも2代真柱と関わりのあったコンゴ人のノソングを日本に招聘する査証申請に関わったという。また、同氏は天理教関係者が政府との交渉や大臣と面会する時などにも通訳も兼ねて同伴する等、天理教のコンゴ布教全般の世話取りにもあたっており、天理教がコンゴで布教公認を得た1964年に外務省の本省に引き上げたという。

しかし鈴木はその後、ちょうど鎌田や田中健三がパリ出張所の設立に奔走していた1968年の夏に、文化部書記官としてパリの大使館に赴任することになる。そして鎌田と田中は、鈴木と面識のあった紺谷久則ヨーロッパ課長から紹介を受け(1969年3月4日付書簡)、同氏に「物件買収をはじめ、各種団体設立に関する法規の調査、そして活動の内容について等、あらゆる事柄に関して相談に乗って」もらったそうである(鎌田 2013)。そしてそこから、先に述べた日本語学校設立の話につながっていく。

このように、様々な面で天理教のコンゴ布教やヨーロッパ布教への協力を惜しまなかった鈴木敦也であるが、同氏は2013年1月に逝去しており、日本語学校設立に関して具体的にどういったアドバイスを提供したのかは直接確認がとれていない。しかしながら、鈴木が天理教の文化活動に対して並々ならぬ情熱を傾けていたことが窺える間接的な記述がある。

それは、1969年9月19日付で、鎌田と田中の連名で海外布教伝道部長の畑林清次宛に出された書簡である。この日付は、パリ

出張所の物件購入のために紺谷が来仏している最中、伝道部から提示された予算では当初想定していた規模の物件が購入できないため、鎌田と田中から布教伝道部に陳情書を送った2日後である。

この書簡の中で、鎌田と田中が鈴木から直接聞いた話の内容を詳細にまとめて報告している。鎌田が記すには、鈴木はパリの日本大使館の文化部に勤める者として、「他宗、他団体の動きが手に取るように解」かる中、「如何にしたら天理が巴里で最も効果的に布教活動並びに文化活動が出来るかを考え且つ努力して来た」が、当初の構想よりも小規模な3部屋の建物を購入するという考えを聞かされ、それでは布教師の住居としても手狭で、充実した形で文化活動を行うのは不可能であると、鎌田と田中に再考を促している。そして、「巴里のヨーロッパに於ける文化且つ地理的重要性を、正しく深く認識すれば天理の巴里進出はたゞ単にフランスのみでなく、ヨーロッパに於ける天理の盛衰にかゝる問題であるし、特にフランス語圏、アフリカ諸国の重要な基地になってくるはずであ」と、布教当事者さながらのビジョンも述べている(1969年9月19日付書簡)。

その後予算が増額され、パリ出張所の建物の購入に至ったのはすでに述べた通りである。鈴木熱意がその判断にどれほど影響を与えたのかは推し量るしかないが、畑林部長がこの書簡に目を通したとすれば、全く影響がなかったとは言えないだろう。

さて、話を日本語学校設立の動きに戻すが、この案はヨーロッパ課に伝達され、その後紺谷からパリ出張所長の西村宛に書かれた書簡(1970年9月19日付)で、「伝道部としては日本語学校設置にふみ切ることになった」と報告されている。しかしこの時点では日本語学校のための独立した予算はなく、出張所にある資金で暫くの間のしぐ必要があったと言う。そして、同年の10月頃から西村所長、鎌田、田中の3人で物件探しに歩き回り、翌年の1971年1月8日に、パリ14区の9、rue Victor Condidérant(ダンフェール=ロシュロー駅の近く)に適当な物件が見つかり、1月27日に最終的な賃貸契約を結ぶこととなる。そして、2月16日には「天理日仏文化協会」が設立され、その活動の一環として5月1日に「天理日本語学校」が開校した(鎌田 2013; 天理教ヨーロッパ出張所 1992:14、162)。

こうして、当初の拠点の構想にあった文化交流センターとしての役割は、パリ市内にある別の建物で行われることとなった。後に触れるが、宗教施設と文化施設を分けて運営する方法を結果的に採ったのは、フランスの法的な環境を考えると極めて理にかなった判断だったと言える。また、田中自身が後に「全く的を得ていたと言っても過言ではない」と述懐しているように(天理教ヨーロッパ出張所 1992:27)、日本語学校という選択については、1970年代以降のフランスの文脈を考えた時、現地に身を置いていた関係者の先見の明を感じずにはいられないのである。

[引用文献]

鎌田親彦「天理日仏文化協会創設の経緯」天理日仏文化協会関係者の集い講演原稿、2013年10月25日。

天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所20年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992年。

中山正善『北報報告』天理教道友社、1960年。

## 戦後の台湾社会の変化と伝道庁復興

## 戦後台湾における社会状況の変化

第2次世界大戦における敗戦により、日本は台湾の領有権を失い、台湾に居住していた日本内地出身者とその家族は本人たちが希望するか否かに関わらず、強制的に引き揚げることとなった。当時、台湾にあった伝道庁をはじめ、39カ所の教会は、その責任者となる教会長が日本人だったため、すべての教会長が不在となってしまった。

その後、台湾の統治を担ったのは、中国大陸を支配していた中国国民党による国民政府であった。中国国民党は日中戦争において中国共産党とともに日本を敵として戦った。そのため、戦後に新たに統治下となった台湾は、敵国として戦った日本そのものに映ったであろう。50年にわたる日本による統治の影響は台湾社会の隅々に行き渡っていたのである。日本から広まった天理教もまた、日本の宗教として迫害される危険にさらされた。

1947(昭和22)年2月28日に台北市で発生した、国民党支配に対する台湾住民の抵抗運動である二・二八事件は、その後台湾全土に広がり、国民政府による長期的な白色テロ、すなわち民衆に対する政治的弾圧・虐殺へと拡大する引き金となった事件である。この事件で発令された戒厳令は台湾省政府の設立によりいったん解除されたが、1949(昭和24)年5月19日に改めて発令され、1987(昭和62)年まで38年もの長い間続けられることになった。この間、政治活動や言論の自由は厳しく制限され、政治・思想犯の投獄や処刑などにより、厳しい恐怖政治が続いた。

このような社会状況の変化の中でも、現地の天理教信者は土着の漢人民間信仰の形態にカムフラージュさせるなど、いろいろな工夫をしながら天理教の布教活動を細々と続けていた。2代真柱は1960(昭和35)年に海外巡教の帰路、台北にある松山空港に立ち寄り、また1963(昭和38)年にも海外巡教の帰路に台湾を訪問している。その際に、戦後は自由に布教活動もできず、おぢばがえりすらできない台湾の信者の切実な願いを受けて、台湾伝道庁を復興するべく、そのためにまず庁長を赴任させたいという思いを強くした。だからこそ、1963(昭和38)年に台湾総統府の秘書長(日本の官房長官に相当)であった張群を訪ねた際に、張から何か希望があればというので、真柱から台湾に熱心な信者が相当数あり、日本からの指導者を求めているので、適当な者の渡台ができることを要望されることになった。

ちなみに張群は、戦前に蒋介石と共に日本に留学し、辛亥革命後の内紛で敗北後に日本に一時亡命し陸軍士官学校でも学ぶなど、総統府において対日交渉のキーパーソンを務めた知日派の人物であった。

## 三濱善朗庁長の台湾赴任

教会本部としてまず取りかかるべき課題は、組織体制の上で戦後も存在し続けている「台湾伝道庁」をどのように再び台湾の地で設置し、台湾伝道復興の中心となる人物を庁長として赴任させるかということであった。そこで1967(昭和42)年1月26日のお運びで、台湾伝道庁の8代庁長として本部青年であった三濱善朗が任命された。三濱庁長は、布教目的で渡台

するためのビザの取得することから準備を進めなければならなかった。それまでは布教ビザで渡台し、台湾で長期滞在して布教活動に従事するビザが日本人に発給されたことはなく、また海外伝道部アジア課(当時)においても布教ビザの申請方法について詳しく知る者はいなかった。しかし、幸いにして布教ビザの発給は無事に認められ、同年8月15日に戦後の台湾庁長として初めて台湾の地を踏むこととなった。

ちなみに、この3年前の1964(昭和39)年には、天理大学から清水栄吉助教と大久保昭教講師を学術研究として開校してまもない中国文化学院へ派遣した。両氏は滞在中に学院の創設者である張其昀と面会している。翌年からさっそく清水栄吉が天理大学からの交換教授として同学院日本語学科に赴任することになった。実は、中国文化学院に創設された日本語学科こそ、台湾の高等教育機関に設置された戦後初めての日本語学科であった。張其昀は教育部長(日本の文部科学大臣に相当)や中国国民党秘書長などの要職を歴任した人物で、中国文化学院という名称は総統であった蒋介石の提案であるというエピソードも残っているほど、国民政府の中で強い影響力をもつ人物であった。

## 台湾伝道庁の復興

戦後、初めて台湾を訪れた三濱庁長は、すでに文化学院で交換教授を務めていた清水栄吉に迎えられ、活動の拠点となる伝道庁の仮事務所を探すことから始めた。現地信者の協力を得て、台北市内の独立した家屋を伝道庁の仮事務所として借りることができた。

活動の拠点が定まり、次に取り組むべき課題は、戒厳令下でも取り締まりを恐れずに布教活動ができるための政府による公認を得ることと、台湾の信者がおぢばがえりできるよう渡航の自由を実現することであった。また、台湾の現地信者の信仰上の課題としては、カムフラージュのための漢人民間信仰の影響を排して、天理教本来の祭儀や祭服を整えるとともに、戦後に本来の教祖の教えに戻ろうと編纂された新しい『天理教教典』の教えを広めるなど、教化育成を進めることが必要となっていた。

まず、政府に布教活動の認可を申請するため、台湾の全島的な天理教組織として財団法人を設立することとなった。これは、台湾においては宗教法人法がないため、宗教団体も財団法人として認可を受けるためである。この申請は、1972(昭和47)年5月に「財団法人中国天理教総会」として中央政府に認可された。三濱庁長が渡台してから約5年後のことである。

そして、台湾における活動中心となる伝道庁の建設が重要となった。伝道庁による用地選定と土地購入、また建物の設計・建設の結果、1977(昭和52)年9月11日に神殿落成奉告祭が3代真柱夫妻を迎えて行われた。三濱庁長が渡台してから10年後のことであった。

こうして、台湾において戒厳令下という厳しい状況の中、財団法人として中央政府(内政部)の認可を得て、全島的な信仰の拠点となり教化育成の場として伝道庁の建物が完成し、ようやく伝道庁を中心とした天理教の活動が進められる段階になったのである。

## 21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑧

天理教リヨン布教所長  
藤原 理人 Masato Fujiwara

私はフェミニストでもなく、女性の権利拡大を謳う活動家でもないが、天理教のフランス布教において重要なテーマであると思うので、男女平等について書いてみたいと思う。

フランスで天理教の布教に携わっていて、特に女性の口から何度となく耳にするのが「教祖が女性であることは素晴らしい」という言葉である。私自身もその重要性を頭ではわかっているつもりではあるし、おそらく日本人の布教師や信者もそれを強く意識しているはずだ。おそらく、そういう声が多いという国はたくさんあると思う。ただ、私のように女性教祖を持つ天理教を、生まれつき身近に感じつつ信仰生活を送ってきた信者たちには、そのインパクトの強さを測りかねる部分もあるのではないだろうか。

先日、リヨン布教所の講社祭で教祖中山みきの生涯、天理教でいうところの「ひながた」についてざっと紹介した。前回（2014年10月号）でも触れたように、ふだんはおつとめが布教の根幹をなすとの意識から、その実践の重要性について繰り返し説き続けているのだが、その日は少しテーマを変えてみた。すると、その話がよほど気になったのか「なぜそんな話を今までしてくれなかったんだ。そのような話をもっと聞きたい。」と年配のご婦人から指摘された。本当にさりりと紹介しただけなのだが、予想外の反応にこちらが驚いたほどである。

どうやらフランスにおいて女性教祖の意味の大きさが私の想像以上であることが、在仏20年を超えてようやくわかってきたような気がしている。おそらく大半の日本人天理教信者が想像しているよりもっと鮮烈で、計り知れない輝きを、特にフランス人女性には与えているはずである。

フランスでは歴史的にだけではなく現代社会においても、女性は低く見られているという意識が強いように思われる。そのためもあって、男女の平等を説いている宗教の創設者が女性で、なおかつ18世紀末日本の封建体制下に生まれた女性であるという事実だけで耳を傾けるフランス人女性は少なくない。日本の歴史を知らなければ、当然フランスの歴史的背景と重ね合わせてイメージするだろうが、思うにカトリック一辺倒だった20世紀以前のフランスでは、リジューのテレーズ（Thérèse de Lisieux）のように女性がみずみずしい信仰の風を吹かせることはあっても、見聞きしたことのない新たな教えを説き始めるなどは、想像の世界でもあり得ない出来事なのかもしれない。そう考えると女性教祖が教えた男女平等の教義は、フランス布教においては何にも代えがたい大きな武器となりうるのである。

それに加えて、男女平等は中山みき在世時から教義として、また思想としても確立されている。信仰実践の最高儀式であるおつとめは教祖が直々に教えた祭儀だが、男女が同時に同じ場所で一緒に勤めることになっており、また

教えの根幹をなす十全の守護には半分半分で男性要素と女性要素が含まれている。教祖の直筆による「おふでさき」には、「この木いもめまつをまつわゆはんてな いかなる木いも月日をもわく」（7号21）とようぼくになる男女に分け隔てはないと明言されている。また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』158番の逸話「月のものはな、花やで」には教祖の言葉として「女は不浄やと、世上で言うけれども、何も、不浄なことありゃせんて。男も女も、寸分違わぬ神の子や」とある。これらの事実は、フランス人女性にとって希望の光のように映るようだ。

翻って天理教の男女平等の実際は、教えほど明確に達成されていないと言えるのではないか。さまざまな場面で男性中心主義を感じてしまうことも少なくないだろうし、その傾向は宗教が持ちうる保守性によってより強くなっていると言ってもいいだろう。天理教内の男女平等の達成度は、現代日本の会社や家族、社会通念と比べても低いと言えると思う。

女性の教会長はいる。しかし、男女の教会長が全く同等に扱われているかと言えば疑問符が付く。十分な統計資料は持ち合わせていないが、地方の一宗教法人（教会）のトップは女性であっても、決定権を持つ大きな組織体のメンバーに女性が少ないことを証明するのは難しくないはずだ。

ライシテの歴史でも見てきたように、科学の力が宗教を圧倒し、男性がその進歩に傾倒するようになってきた20世紀に、カトリックを日常生活で実地に支えてきたのは女性の活躍に他ならない。現代の天理教も大半の活動は女性信者が支えていると感じている。しかしながら、信仰生活面の土台として活躍するだけでなく、女性自身ももっと声高らかに教祖中山みきの教えを標榜し、決定権を持つ責任ある立場に進出すべきであろう。慎みや謙虚さは美德であるが、男性と同等の地位を要求することは悪ではない。また男性信者もそれを促すべきである。天理教の定期刊行物や講演会では女性の発言をよく見かけるが、それに加えて組織の芯になる部分にもっと女性の存在があれば、少なくともフランス布教にとって追い風になることは間違いない。

日本という国は、男女平等の先進国と見做されていないと思うが、だからこそ天理教が世間に先んじて、教祖の教えを体現し実践すべきである。あらゆるレベルの会議体、組織体の重役に、信者たちの目にとどく形で女性を加え、あらゆる場面で女性の存在感を高める努力をもっと強く進める必要があると思う。女性を起用すること自体が目的ではないが、責任ある立場に女性の存在が希薄であれば、天理教のフランス布教に有利に働かない可能性が高いだろう。天理教が日本だけのものでよいのであれば問題ないかもしれないが、世界たすけを標榜するのであれば女性の進出は一刻を争う重要課題であると思う。

一つの宗教しか知らない者は宗教を一つも知らない

私たちは「宗教」という語をどのように捉えているだろうか。「〇〇教」のように教団を指す場合もあれば、個人の信仰信念や文化的価値観を指す場合もある。今日、日本人の多くが宗教と呼ばれるものをほとんど分かっていない状況で、宗教に対するイメージを抱いている。その背景には、戦後日本における学校教育がある。第2次世界大戦から約80年経とうとしているが、日本人のほとんどが、宗教——この語がどのように捉えられるかということも含めて——を学ぶ機会はなかった。また、新聞やテレビなどのマスメディアが、宗教に関する報道を抑制してきたことの責任も重い。いわば、日本人は“宗教を知らない”のである。

グローバルな状況において、宗教指導者には「宗教」という語との対比のなかで、自らが信じる教えについて語る力が求められている。一方で、そうした説明を行うことができる者がどれくらいいるだろうか。宗教学の祖として知られるマックス・ミュラー (F. Max Müller, 1923-1900) は、「一つの宗教しか知らない者は宗教を一つも知らない」という趣旨で宗教学の意義について述べた。この言葉は、ゲーテの「一つの言語しか知らない人は、どの言語も知らない」に由来する。一つの言語しか知らない者は、「言語とは何か」、「言葉とは何か」という問いに答えることはできない。グローバルな視点に立って、世界の言語を見渡してみればはじめて、言語や言葉について説明することが可能となる。これは宗教や神学についても同じことが言えよう。

自分の信じる宗教の視点から、世界を見ることは確かに重要である。しかしながら、私たちの周囲には異なった宗教の教えや価値観をもつ人々が暮らしている。彼らのことを学ぶことははじめて、私たちは自分の宗教を知ることが可能となる。ミュラーは、「一つしか知らない者は、一つも知らない」(He who knows one, knows none.) という言葉が宗教にも当てはまると述べる<sup>(1)</sup>。宗教者、とりわけ宗教指導者は、グローバルな視点に立って自分の信じる教えをより深く学ぶ必要がある。1949年、中山正善2代真柱が新制天理大学に宗教学科を開設したのは、将来、教会長をはじめとした天理教の指導者層に当たる人々が、他宗教の理解を通して天理教を深く学ぶためであった。

### 「宗教の世界史」

「世界神学」を構想したW・C・スミスは、宗教現象の動態<sup>ダイナミクス</sup>を表現するために「伝統」という語を用いた。「宗教」という語について、彼は複数形の「レリジョンズ」(religions)ではなく単数形の「レリジョン」(religion)を用いた。「宗教」を単数形で用いるという点に、スミスの宗教論の特徴が現れていると言える。

スミスは「宗教学」という語を“History of Religion”と単数形で表現した。「宗教団体は複数あるし、宗教と呼べるものは数限りなくあるはずなのに」と考える読者もいるかもしれない。『世界神学をめざして』の第1章は、「単数形の宗教学」(A History of Religion in Singular)としている。スミスは、宗教が現

在を生きる人々によって絶えず変化している現象と捉えていたため、伝統として新たに積み重なっていることを指摘した。それゆえ、今を生きる私たちの活動は、これまで積み重なってきた「人類の宗教史」の一つの歴史として新たに積み重ねられるものである。

問題は、すべての宗教は同じであるということではない。一つの宗教ですら、世紀ごとに、あるいは国ごとに、あるいは村や町ごとに異なることを歴史家は承知している。その程度があまりに大きいため、私は具体的名称としての「宗教」(‘religion’)の語や、また「ヒンドゥー教」「キリスト教」などの用語の使用を止めるまでにいたっている。というのは、それらの名称に一貫して対応するようなものは、地上にも、あるいは天上にも何ら見出されないからである<sup>(2)</sup>。

同じ宗教の教えであっても、地域や言語が変われば考え方は異なる。時代が異なれば変化していくのは当然であろう。スミスは宗教を単数形で用いることで、すべての宗教は同一であることを主張したわけではない。私たち一人ひとり意識するとせざるにかかわらず、「宗教の世界史に参与してきた」<sup>(3)</sup>。言い換えれば、時間的、空間的、言語的に制約を受ける人間が生きた伝統は、単数形で表現される宗教の世界史へ回収されていく。

大航海時代以降、今日に至るまで、各宗教の教えはグローバルに移動し展開してきた。人々の移動は交通機関の発達によって、情報の流通もインターネットの普及によって目まぐるしい。宗教現象は社会に暮らす人々が互いに影響し合いながら形成され、変化していることを踏まえるとき、完全に独立して存在することは極めて困難になってきている。地球に暮らす人間共同体は、「宗教」(レリジョン)と呼ばれる現象を共に作り出している。このスミスの考えは、宗教教団がグローバルに展開していくうえでの示唆を与えているように思われる。

### 【註】

- (1) マックス・ミュラー (塚田貫康訳) 『宗教学入門』晃洋書房、1990年、12頁。
- (2) ウィルフレッド・キャントウェル・スミス (中村廣治郎訳) 『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話—』明石書店、2020年、11頁。
- (3) 同上、35頁。

### 【訂正】

- 2024年11月号左段で以下の点に誤りがありました。
- (誤) 研究所を創設したりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1984年には
  - (正) 研究所長を務めたりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1986年には

## はじめに

本連載ではこれから、植民地研究の視点から日本占領期の香港について見ていく。

戦前、1945年以前の「帝国」日本は、「内地」と呼ばれた地域以外に多くの「外地」を有していた。ここで言う日本の「外地」には、「植民地」、「租借地」、「委任統治領」、「軍事占領地」、「外国居留地」、「満州国」が含まれる。これら日本の「外地」をめぐる歴史研究は、おもに台湾、朝鮮半島、樺太、満州、南洋群島をフィールドとして行われ、日本における植民地研究、および「帝国」研究の基盤を築いてきた。

このような日本の「外地」をめぐる歴史研究にあって、日本占領期の香港はこれまで、研究対象として取り上げられることが相対的に少なかった。その理由としては、占領期間の短さや統治形態の特殊性、およびそうした占領統治と関係する歴史資料の少なさ、資料へのアクセスの困難さなどが考えられる。

まず、日本軍による香港占領は1941年12月25日に始まり、1945年8月15日の日本降伏・武装解除によって終わる。この間、上述した日本「外地」の区分によれば、香港は「軍事占領地」に位置づけられる。つまり、日本軍による占領統治期間はわずか3年8カ月であり、しかも中国南方や東南アジアへの日本による軍事侵攻が継続するなかでの占領統治であったのであり、日本が植民地統治をおこなった台湾や朝鮮半島において、行政機関としての総督府が設置されて植民地的な諸制度が制定・実施されていくような、いわゆる「安定的な統治」とは異なり、社会的混乱が終始継続するなかでの占領統治であった。また、現在の香港ではこの日本軍による占領統治の開始日を「Black Christmas」、日本占領期を「三年零八個月（3年8カ月）」と象徴的に呼ぶことで、歴史記憶のうえで「暗黒期」として位置づけられている。その前後の時期にはイギリスによる植民地統治が結果として継続することとなり、日本による占領統治はイギリスによる植民地統治の歴史のなかに「埋没」するような形になっていることも、相対的にこの時期の特殊さを浮き彫りにしている。

香港の占領統治にあたって、1941年12月の統治開始当初には「香港軍政庁」が設置され、その2カ月後の1942年2月には軍政庁に代わる形で「香港占領地総督部」（以下、香港総督部）が設置された。この香港総督部の設置は、いわゆる「軍政」から「民政」への移行を示していると言われることもあるが、香港総督部のトップである香港総督には、磯谷廉介や田中久一といった陸軍中將が任命されており、占領統治の最初から最後まで軍政が敷かれていたと見て良い。

このような特殊な統治形態もあって、日本占領期の香港にかかる資料は十全には残されていない。基礎資料となるはずの香港総督部の公文書については今のところ、その一部が防衛省防衛研究所に保管されており、国立公文書館アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを通じて公開されている。また、現在の香港にある香港政府档案処が政府文書を保管・公開している香港歴史档案館（Public Records Office）所蔵の公文書中には、香港総督部の公文書を見出すことはできない。したがって、当時刊行された著書、新聞、雑誌などの二次資料を中心に、周

辺的な資料から占領統治期の香港の様子を描き出していくことが、歴史研究には求められている。こうした資料の「不在」「偏在」状況も、日本占領期の香港を研究するうえでの大きなハードルであるといえる。

本連載では、こうした資料の状況も踏まえ、香港総督部の公文書、香港総督部の「代弁者」としての役割を果たしたと言われている新聞『香港日報』、および香港総督部報道部が監修した『軍政下の香港』（香港東洋経済社、1944年）を主な資料とし、香港で出版されている研究書・学術書を参照しながら、日本占領期の香港における占領統治のありようについて検討を進める。

なお、検討を進めるにあたって、本連載では筆者の専門にかかわる植民地研究の視点から香港の占領統治を見ていくこととする。ここでは、日本による台湾統治のもとで「台湾ナショナリズム」がいかにして生まれたのかについて検討した呉叡人『フォルモサ・イデオロギー』（梅森直之・山本和行訳、みすず書房、2023年）に基づき、日本による植民地統治のアウトラインについて述べることによって、次回以降の内容につなげていきたい。

呉叡人は同書のなかで、「大日本帝国再考」として日本の国民国家化のプロセス、すなわち幕末維新期以降に「日本」という近代国家、および「日本人」という近代的な国民が形成されていくプロセスについて検討を加え、その延長線上に日本による植民地統治を位置づけている。呉叡人は、日本の近代化のプロセスが「エリートが統一的な政治的権威を確立し、それを周縁へと拡大する際に、差異を克服し、内部に同質性をつくりだすプロセス」であると捉え、「このプロセスは1868年の西南諸藩による東北諸藩の征服とともに開始されていた」と指摘している（65頁）。

いわば、日本の近代国家形成のはじまりのなかに、既に日本の植民地主義的性格が組み込まれ、近代国家形成のプロセスがすなわち植民地的な領土拡大のプロセスであったということが示唆されている。したがって、呉叡人は近代国家としての日本の形成過程を以下のように捉えている。「明治国家の歴史は、領土拡張の連続であった。物語は蝦夷地（北海道）の包摂（1868年）に始まり、琉球王国（1879年）、台湾（1895年）、樺太すなわち南サハリンの包摂（1905年）を経て、朝鮮併合（1910年）で完結する」（66頁）。近代国家日本の形成過程は、こうした連続する領土拡張のプロセスと並行して展開していたのであり、そのなかで徐々に日本による植民地統治の原型と、その運用形態が形成されていった。もちろん、それぞれの地域およびその時々の時勢に合わせて統治の方法には調整が加えられていたが、「中央／周辺」という厳然たる区分のもとに植民地統治が行われる、その基本的な枠組みは1868年以降の統治地域の拡大にもなって一貫して形成・強化されていったのであり、1910年の朝鮮併合以降も広がる「外地」においては、それまでに形作られた植民地統治の枠組みが順次適用されていったと見ることができる。

したがって、本連載ではこうした日本における近代国家形成にあって形作られてきた植民地統治の枠組みを意識し、その延長線上に日本による香港占領を位置づけ、その占領統治のありようについて見ていくこととする。

## 第4講：36「定めた心」

おやさと研究所嘱託研究員

八木 三郎 Saburo Yagi

## 入信までの経緯

増井りんは、天保14年（1843）2月16日、河内国大県郡大県村（現、大阪府柏原市大県）に、父善治、母うのの一人娘として生まれた。両親の間になかなか子宝が授からず、8年目にしてようやく生まれたのがりんであった。壊れ物に触れるかのごとく大事に育てられたようである。2歳の時、熱病に罹り医者の手当てを受けるもの一向に良くなり、医者に匙を投げられたところ、氏神の鐸比古神社に父善治は昼夜をいとわず一心に祈願した。そのかいもあってか、重篤な病も数日後には全快した。6歳から11歳まで大県村の学者小山千齊に読み書きを習っている。12歳からは大阪から来ていた裁縫の師匠について学び、また、祖母の許でさらに裁縫を仕込まれた。

文久元年2月、りんは19歳で婿をもらい、その後3人の子供を授かっている。満ち足りた日々を送っていたが、明治5年（1872）、30歳の時に父親と夫を相次いで亡くしている。その精神的打撃、苦痛からなのか、明治6年頃からりゅういん癩（胆嚢炎）を患い、夜になると腹部の鈍痛で眠れない日々が続いた。医者にも易者にもみてもらい、大和の小房観音にも平癒の願掛けを行っている。しかし、症状は治まらず、生駒郡の灸医者、瓢箪山の稲荷や辻占いなど各地に願掛けに向かっていた。そんな中、いよいよ人生の大きな転換期となる明治7年を迎えた。同年10月25日の朝から深夜まで裕の着物を縫い、ようやく出来あがった26日の朝、りんの両眼は痛みで腫れ上がり、見えなくなった。その後、医者にかかりあらゆる手当を施してもらいが、回復することはなく、医者より「ソコヒ」と診断され、この眼病によって、りんはおぢばに引き寄せられた。

## 「ソコヒ」

りんのソコヒについては、どのような症状であったのか、詳細は定かでは無い。わが国では眼病の治療は、古くから行われていたことが記録に残っている。16世紀の永禄・天正年間の医学書『眼目明鑑』によれば、ソコヒ（内障）とは、角膜と水晶体の間にある「虹彩」より奥の部分の眼疾患の総称をいい、血内障、石内障、黄内障、黒内障、青内障、白内障、赤内障の7種があると記されている。その治療方法は、点眼、眼薬投与のほか、内障針（鍼）などを使った手術療法が記されている。ソコヒは「針をたつこと」と記載され、とりわけ針を用いて手術することを重要視していた。

ソコヒの用語は現在では、白内障や緑内障という言葉に置き換わっているが、昔も今も変わることなく、多い眼病である。目を酷使する現代社会の生活の中にあっては、視覚機能・視力の低下は誰にでも起こりうる。近視、遠視、乱視、老眼をはじめとして、白内障は50代の半数、60代の7～8割、70代は8～9割、80代にはほぼ全員が白内障になるといわれている。そのほか、緑内障や加齢による視力の低下は決して珍しいことではなく、多くの人が経験している。

## 逸話の内容

りんは眼病を患い、失明してしまう。悲嘆の涙にくれる中、12歳の長男幾太郎が道で出会った人から「大和庄屋敷の天竜さんは、

何んでもよく救けて下さる。三日三夜の祈祷で救かる。」という話を聞いて、早速親子で大和の方を向いて、三日三夜のお願いをするが、一向に効能はあらわれない。そこで、男衆の為八を庄屋敷へ代参させることになった。為八は、赤衣を召された教祖を拝み、取次の方々から教の理を承わり、その角目角目を書いてもらって、もどって来た。そして、りんは「教の理を聞かせて頂いた上からは、我が家のいんねん果たしのために、たすけ一条の道を通らせて頂きます」と家族一同、堅い心定めをして、一家揃って三日三夜のお願いに取っかかった。おぢばの方を向いて、なむてんりわうのみことと、繰り返し、繰り返し、お願いし、三日目に不思議な全快の御守護を頂いた。

その後、おぢばにお礼参りをした際、教祖から「さあ〜一夜の間に目が潰れたのやな。さあ〜いんねん、いんねん。神が引き寄せたのやで。…さあ〜楽しみ、楽しみ、楽しみ。」と眼病を通してお手引き、引き寄せられたことを伺い、さらに今後はお屋敷で勤めるよう、それも楽しんで通るよというお言葉を頂かれた。

## 逸話からの思案

この逸話は、ソコヒによって失明した眼を教祖によって救っていただき、また眼が見えるようになったご守護の話である。天理教では入信して鮮やかなご守護をいただく話は山ほどある。しかし、必ずしもそんな事例ばかりではない。今回の眼病を例にとって言うならば、見えない眼が見えるようになる、また聞こえない耳が聞こえるようになる、歩行不能の人が歩けるようになることを願って、それがご守護だと信じて神様に願い、信仰するものの、中には現状のままという事例も少なくない。奇跡とも言うべきご守護を願い、はたまた因果応報的に教えをとらえ、今生で悪いんねんを果たし、来生は少しでも人並みに、五体満足を願う信仰が「障害」の分野には数多くある話なのである。

天理教の教えは、五体満足を追い求める教えではない。陽気ぐらしを妨げる心のほこりをはらい、いかなる中でも陽気ぐらしができることを説く信仰である。今を生きる、生かされている今に喜びを見だし、我も他者も共に互いたてあい、たすけあいの心になってもらうことが目標なのである。

私見を言えば、仏教の伝来以降、長い年限の中で日々の出来事、現れた物事を因果応報的に解釈することは無きにしも非ずである。しかし、戒め的な教理の説き方は、ややもすれば当事者へのステイグマになり得る危険性ははらんでおり、現代社会ではそぐわないことなのである。

悟り方は「一名一人」でそれぞれに異なるだろうが、重要なことはさまざまな繋がりの中で今の自分が存在し、あくまでもポジティブにその中をいかに日々勇んで陽気ぐらしの心で通るのである。その心づくりの日々を追い求める信仰が天理教である。

今回の逸話に登場した増井りんは、自らの眼病から「だめの教え」を知り、その患いを通して「たすけ一条」の心定めをして、教祖の御教えどおりに生涯通られた方である。しかし、この逸話はただ眼が見えるようになったご守護、奇跡を説いたお話ではなく、ややもすれば御利益信心になりがちな心に信仰とは何かを深く思案させていただく逸話である。

## 第372回研究報告会（2024年11月7日）

「名前（ファーストネーム）の音韻的分析—イングランドとウェールズの名前を中心に—」

山本 晃司（天理大学国際学部准教授）

2024年11月7日（木）に研究所第372回研究報告会をおやさと研究所会議室で行った。名前に関する先行研究をもとに、イングランドとウェールズで子どもに名付けられる男女名を音節数、強勢位置、強勢位置での母音そして子音の種類の4点に焦点を当て、男女差があることを報告した。本研究発表で分析した母音に関して言えば、女性は前舌高母音が多用され、男性は前舌低母音が多用されるという違いが見られた。その一方で、本テーマの代表的な先行研究結果との共通点もあった。/i/（“eat”などで使われる母音）が男性名よりも女性名において多用される傾向が本発表でも見られる点である。男女間で特定の母音がなぜ好まれるのかについては、音象徴がその要因として1つ挙げられるが、それ以外の要因については現在も研究中であることを報告した。なお、本発表会ではデータの扱い方や分析方法などについて貴重なコメントをいただいた。

## 2024年度宗教研究会兼伝道研究会を開催（11月8日）

「明治神宮の国際交流とその課題」

伊藤 守康（明治神宮国際神道文化研究所）

明治神宮の禰宜<sup>ねぎ</sup>で同神宮国際神道文化研究所の国際事業課長の伊藤守康氏が、標記タイトルについて発表した。まず自身のこれまでの海外での職務経験について述べた後、明治神宮の略史や概要について簡単に紹介。そして、明治神宮に参詣に来た海外からの要人や訪問者に対応する際に、神道の何をどのように伝えるかについては相手の文化背景などを考慮した工夫が必要であること、語学を含めてその対応が可能な人材を今後いかに育成していくのかなどが課題であることを、いくつかの実例を挙げながら説明した。明治神宮での国際交流においては、異文化の他者との関りが自己の研鑽にも繋がることを念頭におきつつ、対外発信に関する事業の理解度や認知度を神職間で高めていくべき、といったことが語られた。さらにネット情報社会において、外国人のみならず、日本人への訴求の大切さが挙げられた。また報告者がこれまで参加したさまざまな宗教間対話のイベントや行事を紹介し、その交流の意義についても言及した。引き続き行われた質疑応答では、日本の宗教が国際的な宗教間対話を行う際に留意すべき事柄などについて活発な意見交換が行われた。（尾上 記）

## 連載執筆のねらいと執筆者紹介

「日本占領期の香港—植民地研究の視点から」

山本 和行（天理大学国際学部教授）

戦前、1945年以前の「帝国」日本は、「内地」と呼ばれた地域以外に多くの「外地」を有していた。ここで言う日本の「外地」には、「植民地」、「租借地」、「委任統治領」、「軍事占領地」、「外国居留地」、「満州国」が含まれる。これら日本の「外地」をめぐる歴史研究は、おもに台湾、朝鮮半島、樺太、満州、南洋群島をフィールドとして行われ、日本における植民地研究、および「帝国」研究の基盤を築いてきた。

本連載では、植民地研究の視点から、相対的に研究蓄積のうすい日本占領期の香港について見ていきたい。香港は上述した「外地」の区分によれば「軍事占領地」にあたる。日本軍による香港占領は1941年12月25日に始まり、1945年8月15日の日本降伏・武装解除によって終わる。このことから、香港では占領開始日を「Black Christmas」、日本占領期を「三年零八個月（3年8カ月）」と象徴的に呼ぶことで、歴史記憶のうえで「暗黒期」として位置づけられている。そのように捉えられる日本占領期の香港について、植民地研究の知見や方法を踏まえながら、あらためてその歴史的な位置づけについて考えたい。

山本和行（やまもと かずゆき）

専門は植民地教育史、博士（教育学）、単著に『自由・平等・植民地性—台湾における植民地教育制度の形成』（2015年）。

## 2024年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10） —

2024年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信しています。

第1回 6月 井上昭洋所長 172話「前生のさんげ」

第2回 7月 澤井真研究員 114話「よう苦労して来た」

第3回 9月 岡田正彦研究員 135話「皆丸い心で」

第4回 10月 八木三郎研究員 36話「定めた心」

第5回 11月 森洋明研究員 85話「子供には重荷」

第6回 1月 中西光一研究員 144話「天に届く理」

グローバル天理  
第26巻 第1号（通巻301号）

2025年（令和7年）1月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050  
TEL 0743-63-9080  
FAX 0743-63-7255  
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>  
E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan